



キヤノングローバル戦略研究所 (CIGS)
CIGS&スティムソン ジョイントセミナー
「ユーラシア戦略：米国および日本の視点」
【要旨】

日時：2017年6月16日

場所：1211 Connecticut Ave NW, 8th FL, Washington, DC 20036

2017年6月16日にスティムソンセンターで開催された本セミナーでは、米国と日本の視点からユーラシア戦略に関する討論が行われた。辰巳由紀氏が討論の司会を務め、スティムソンセンターの Ellen Laipson 氏と Sameer Lalwani 氏、キャノングローバル戦略研究所(CIGS)の宮家邦彦氏と慶應義塾大学・CIGS の神保謙氏の4名のパネリストが討論を行った。討論は、主として、以下の3つの考えに焦点を当てた。すなわち、グローバル化および共通な地政学的利益の結果として生まれたユーラシアという幅広い概念、覇権主義的かつ修正主義的勢力を生む可能性がある権力の興亡、および東アジア諸国が国際秩序の新たなルール策定に携わる可能性である。

パネリストは、多数の国益のバランスとして、ユーラシアの概念を認識することの重要性を討論した。ユーラシアの概念は、個々の官僚国家にとって必ずしも原則的な指針とはならないが、国際協力を理解する一助となり得る。Lalwani 氏は、米国は、潜在的な覇権国家の台頭とのバランスを取るために、他の勢力との協力を戦略化しているという考えを紹介した。宮家氏は、主な戦略目標の一つは世界各地における覇権主義的勢力の台頭を防ぐことだという考えに同意した。また、ユーラシア地域では、修正主義的勢力が重要な役割を担っており、国際秩序を変えようとする目論んでいるという考えも紹介した。宮家および神保両氏によると、日本の戦略的利益は過去20年間で変化している。両氏は、日本は海洋国家としての立場を維持するため国際的な自由主義的秩序を必要としており、地域のバランスを維持し修正主義的勢力が現れるのを防ぐため協力が必要だと述べた。

Lalwani 氏は、明らかな修正主義的國家はごくわずかだという主張に異議を唱えた。さらに、どのような国でも、何らかの方法で現状に影響を及ぼそうとすれば修正主義とみなすことができるため、ある程度は見る人によって修正主義とみなされると指摘した。概して、勢力の盛衰は避けられないが、体制または修正主義的勢力としての地位は、国際環境におけるそれ自体の認識および外部性の目的によって決定される。Laipson 氏は、日本および米国といった一部の国は自由主義的な国際秩序を維持し続けるかもしれないが、中国およびロシアのような国はルール変更を望む可能性があると説明した。神保氏はこれに同意し、2006年以前にはきわめて重要と思われた政治的自由化なしに、諸国が台頭していたと指摘した。

討論後に出た最初のいくつかの質問では、東アジアおよびユーラシアにおける、中国の、特に投資を通じた、影響力の高まりに関心が示された。パネリストは、この地域における中国の活動は自由主義的な国際秩序への挑戦かもしれないが、その一方で、投資先に選んだ国で中国が手を広げすぎるか、あるいは更なる問題を引き起こすならば、他の国にとっては中国の影響力に立ち向かう機会ともなると指摘した。非国家的主体の影響や、均衡勢力としてのインドの現状について質問が複数出た。パネリストは、非国家的主体が今以上に独立した役割を果たす可能性は少ないが、引き続き国家から注目を集

めるだろうと主張した。しかしながら非国家的主体の定義や、非国家的主体がグローバル化の原因または結果によるものかどうかに関しては意見の一致を見なかった。最後に、神保氏が、インドは中国の完全な対抗勢力になるほどには台頭しないと思われるが、同盟国としての役割を果たす可能性はあり、日本にとっては重要なパートナーであると述べた。

辰巳氏が討論を締めくくり、興味深い考えを披露してくれたことに対しパネリストに感謝の意を表した。

以上